

神の裁をし訣別するため

murashit

- ・きみは、きみがはじめてじゃんけんを知つたときから、きみは、一度もじゃんけんに負けたことがない
- ・きみは、夜の池袋西口の公園で、きみは、今日も自身を負かすだれかを待つてゐる
- ・若い男がきみに声をかける
- ・よくあるナンパだ
- ・それはとても暑い日のことで、こんな時間になつても蝉のなきごえがきこえてくる
- ・ここは都会だから
- ・無数の室外機がきみにむかつて熱風をふきかけている
- ・若い男にはそっぽをむいたままだ
- ・酔っぱらつてゐるにしたつて、呼びかけかたがうまくない
- ・きみはしばらくのあいだ、きこえていないふりをする
- ・短く切り揃えられた髪

・年齢は、十八、九くらいに見える

・だけれども、いつまでも無視しているわけにもいかない

・男は……おそらく二十は超えているのだろう

・ただ、正直よくわからない、三十をとうに過ぎて いるように見える  
・だからきみは、じやんけんに勝つたならついていつてもよいとこたえる

・いつものことだ

・三回勝負だからときみはいう

・男おもしろがって、いいよと請け負う

・さて

・じ ゃ ん

・け ん

・それからきみは、一度目にチヨキをだす

・男がだしたのはパーだ

・黒ぐろとした背景をそれひとつでだいなしにする、ひどく欠点のめだつパーだ

・それを自信満々にだせる男のことを、ぼくはなかなか好もしいと感じた

・それからきみは、二度目にパーをだす

・男がだしたのはグーだ

・教訓のないおどぎ話みたいなグード

・男が今日もおなじ場所をぐるぐるとまわっている、そんな姿が目に浮かぶようだ

- きみの勝ちだ
- まあいいじやん
- なおも男は強引に誘おうとする
- けれど、きみは聞こうとしない
- やつぱり下手くそな強引さだ
- 通りすぎる女たちふたりがそれを横目で見ている
- 女たちは毎日のようにここへやってくるから、きみのことをよく知っている
- よく知っているから近づこうともしない
- 女たちはこれからとてもしあわせな結末が待っている
- そのまえにすこしだけの試練が待っている
- きみのことを忘れてしまってから、さらにずっとあとの話だ
- だけれども、それはまた別の話だ
- じゃあもう一度
- と、きみはあらためての三回勝負を申し出る
- チャンスがめぐつてきたにしては怪訝さを隠せない、そんな顔をする
- そんなにじやんけんにこだわるものか？
- 一度目、男は負ける
- さて、三回連続でじやんけんに負ける確率は何パーセントだつけ？
- まあ、それほどめずらしいことじやない

- 二度目、男は負ける
- ふむ
- もう一度やる？
- 男は負ける
- 男は負ける
- まだやる？
- こうなつたら意地だ
- 男にとつて、誘えるかどうかなんでもう関係ない
- だが、男は負ける
- それでもう一度
- 男は負ける
- 空が澄んでいるといえば、この公園でナツキたちのちょうど反対側にいる男の話
- 彼の故郷の町は、この国でいつとうきれいな星がみえる場所なのだと主張してはばかりなかつた
- 町のはずれの小高い山の上にはそれほど大きくない天文台があつた
- だけれども、だれかがなにかを研究しているというわけでもなかつた
- 町にはときどき天体観測会の告知が貼り出され、おさないころの彼は欠かさず参加してい

た

- ・じゃんけんをして、勝った順に天体望遠鏡を覗かせてもらえる、それがたのしみだつた
- ・男はいま空を見上げて、街灯のまぶしさに目をしかめている
- ・だけれども、それもまた別の話だ

- ・もう一度

- ・もう一度

- ・もう一度

- ・何パーセントだ？

- ・男は負けつづける

- ・もういち……

- ・いや

- ・氣味が悪い

- ・氣味が悪いじゃないか

- ・そして、だから、男はあいまいに笑いながら去っていく

- ・そのとき、蝉が木からぼとりと落ちて、わかりやすく死んだ

- ・次の年、そこからちょうど三センチメートル離れた場所に、やはり蝉が落ちて死んだ

- ・その次の年、その二箇所と二等辺三角形を作る、双方からちょうど二センチメートルずつ離れた場所に、蝉が落ちて死んだ

- ・それから何年かたつて、木は切り倒され、かわりにベンチが置かれた

- ・日射しをさえぎるものがなかつたから、ちょうどこの夏のように暑い日、の昼、には不人気な

場所になつた

・ぼくはそれを見ていない

・だけれども、それもまた、それもまた別の話だ

・そんなことが毎日のように起こっている

・この宇宙で

・きみは明日も池袋西口の公園で自分に勝てる何者かを待つのだろう

・きみの名前はナツキという



・ナツキがじゃんけんをするとき、「ぽん」という掛け声にあわせてだして いるのは次の三つ

・完全なグー

・まつたき真球

・石のことだ

・それはナツキにとつて、外界を寄せ付けない孤独の象徴だ

・完全なパー

・どこまでもつづく平面

・紙のことだ

・それはナツキにとつての記録、すなわち過去の象徴だ

- ・完全なチョキ

- ・つながりを切断するもの

- ・ハサミのことだ

- ・昨日見た夢
- ・逆説的にも、それはナツキにとつて他者との関係を象徴していた

- ・すべてがうまくいくようだつた、ようやく見つけ出したのだと思った

- ・それこそが完全であるということだつた

- ・さて、朝起きて、再現してみようとする

- ・当然のことくうまくいない

- ・あらゆる辻褄が合わないまま

- ・だが、じやんけんで昨日見た夢をだすことはないんじゃないだろうか

- ・さて、完全なグーについて

- ・つまり、ナツキの孤独について

- ・そうだな、あなたはどんなときにじやんけんをするだろうか？

- ・双方が、あるいはその場のみなが運に任せてよいと思えるなにかを決めるときに、じやんけんをするのではないか

- ・ナツキは完全なグーをだし、完全なパーをだし、完全なチョキをだす

- ・だからナツキは、ぜつたいにじやんけんに勝つてしまう

- ・だからナツキがじやんけんに負ることは、ぜつたいにない

- ・それがナツキの孤独の原因だつたといえ、あなたはおおげさに感じるだろうか？
- ・だって、この宇宙ではだれもがじゃんけんをする
- ・この宇宙ではだれもがグーとチョキとパーに運命をたくす
- ・ほかの宇宙でどうなのがよく知らないけれど
- ・ところで、あなたはじゃんけんの起源を知つてゐるだろうか？
- ・実はそれほど古いものでもないらしく、あきらかに資料が残つてゐるという意味での歴史としては、それこそ数百年程度のものだという
- ・だれもが知るようになつてからは、百年も経つていない
- ・どうもそららしい
- ・してみると、それなりに若い宇宙なのかもしね
- ・もしかしたら、ひどく若い宇宙なのかもしね
- ・ひどく下手くそで強引な宇宙なのかもしね
- ・昔の話といえば、そうだ、こんなおとぎ話がある
- ・あるところにひとりの囚人がいた
- ・彼はほかの囚人たちとともに、どこだか知らない辺境の土地で、その地の開拓に従事させられていた
- ・毎日毎日本を切り倒しては運んでいた
- ・知つてゐるだろうか、木を切つて運ぶというのはなかなか大変な仕事なんだ
- ・さて、ある日のこと

- ・囚人たちを管理する役人のかしらがやつてきて、彼に命じる
- ・おまえには明日からとても重要な役目を担つてもらわねばならない
- ・おまえには選ぶ権利がない
- ・けれども、安心するがいい、おまえみたいな重罪人にはもつたないくらい樂な仕事だ
- ・けれども、いまでは、この宇宙ではだれもがじょんげんをする
- ・だから、ナツキはうとまれる
- ・だつて、氣味が悪いだろう？
- ・だれかをうとむ理由なんて、それだけあれば充分だろう？
- ・だから、ナツキはつまらない仲間とのつまらないおしゃべりが嫌いだつた
- ・いや、つまらないおしゃべりをするつまらない仲間なんていなかつたから、つまり、つまらない仲間とのつまらないおしゃべりをするつまらない奴が嫌いだつた
- ・そんなわけないはずだつたんだ
- ・ほんとうは憧れていたにきまつているんだ
- ・だから、あたりまえのことだけれど、ナツキにとつて勝つことは呪いだつた
- ・ふむ
- ・どうにも狭い学校という世界の話をしているから、あなたはつまらないと感じたんじゃないだろうか
- ・だけれども、それがナツキにとつて世界のすべて

- ……のうちの半分だつたから
- もう半分についてはあとで話そう
- 続いて、完全なパーについて
- つまり、ナツキの記憶について
- ナツキが思い出せるかぎり最初の記憶は、はじめてのじやんけん、そのときのことだ
- ぼくはナツキがはじめてじやんけんをしたときのことを知っている
- だつて、この目で見たのだ
- それもやはり、暑い夏の日のことだつた
- そうだ、ぼくがじやんけんを教えてたんだ
- ほら、手をひろげて
- これがパーだ
- ほら、指をぜんぶとじて
- これがグーだ
- 次はちょっとむずかしい
- まずは手を広げて、そう、パーみたいに
- それから小指、そなそこ、それから薬指も
- 人差し指と中指はそのまま、そのままそのまま
- いいぞ
- で、親指もとじる

- そうそう
- それがチヨキだ
- チヨキはちょっとむずかしい
- ひとりで歯をみがくくらい、むずかしい
- ゆうやけこやけが流れはじめるまでずっと鬼にみつからずにすむくらい、むずかしい
- じゃあ、やってみよう
- いまから「じゃん、けん」と言うから
- なにをだすか頭のなかで決めるんだ
- それから「ぼん」と言つたら
- さつきの三つのうちどれかをだす
- いいかい？
- ナツキはこくりとうなづく
- もののわかりのいい子だ
- じゃん
- なにをだそう？
- こないだの休日に作つたキムチチャーハンは失敗だつた
- キムチを入れるタイミングがむずかしい
- けん

- あまり早く入れすぎると、白菜にすっかり火が通つてしまつてうれしくない
- 最後の最後に入れてみると、キムチがなんだかべちゃついてしまつて好きじゃない
- ナツキはなにをだす？
- ぽん
- ちようどいいタイミングというものがわからない
- ぼくはパーをだした
- いきなりチヨキをだすのはむずかしいだらうと思つたのだ
- ぼくがだしたのは、これまたひどく欠点の目立つパーだつた
- ナツキはチヨキをだした
- ひどくぶかつこうなチヨキだつた
- 親指が中途半端に浮いていた
- だけれども、それはこの宇宙にあらわれたはじめての完全なチヨキだつた
- そのことを、ぼくはまだ知らなかつたけれど
- そんな完全なチヨキに、ぼくは負けた
- だから、完全なチヨキについて
- それはまず、彼女の母親について
- 歳の離れたきょうだいたちが家を出てからあと
- ナツキは家庭での時間、その多くを母親とふたりですごした
- 母親は比較的おだやかな性格をしていたけれど、喋りかたに多少キツいところがある

- ・ というより、言葉の選びかたがちょっとばかり乱暴なのだ
- ・ そのせいか、「サバサバした性格」と評されることが多かつた
- ・ 彼女は酒を飲むたびにそのことをぼやいていた
- ・ とはいえる、まんざらでもなさそうに見えはしたけれど
- ・ あとはなんだつけな
- ・ そういうえば、晩酌が好きだつた
- ・ だいたい毎晩酒を飲んでは、次の日に宿酔いのまま仕事に出ていた
- ・ ひとりめの子供が生まれてからしばらくやめていたが、乳離れするやいなや晩酌を再開した
- ・ ふたりめの子供が生まれてからしばらくやめていたが、やつぱり乳離れするやいなや再開した
- ・ さんなんめの子供が生まれてから晩酌をやめて、それ以来一滴も飲まなくなつた
- ・ その子がナツキだつた
- ・ そして、彼女の兄について
- ・ 知られているだけで三千を超える並行宇宙のうち、その過半数には兄がいる
- ・ たゞ、この宇宙にはすでにいないうことを、ぼくは確認している
- ・ だからおおむね、いるのだといつていいのだろう
- ・ ある宇宙において、ナツキは兄を探したことがある
- ・ その宇宙はここよりもずっと、なんというか、こみいつたしくみをしている

- その宇宙は都市の連続でできていて、そのときどきで都市と都市との接続が変化するらしい
- 列車を乗り継いで都市と都市を往還する
- できないこともある
- ナツキは兄を探して、人でいっぱいの地下鉄で他人の足を踏み、あるいはだれもいないコンパートメントで眠つたりした
- ナツキは兄を探して、喧騒を乗り継いで、それから兄を見つけたり見つけなかつたりした
- それから、彼女の姉について
- もくもくと小さな石を食べ、それから予言をする彼女は、広くはないコミュニティのなかで崇拜の対象となつていた
- まあ、ひとつ小さな街、そのていどの話だ
- ある日彼女は大きすぎる石を飲み込んでそのまま死んだ
- すべての宇宙で死んだ
- 彼女の予言はとても正確で、それなりに残酷だった
- 彼女はなかなかに怠惰な性格で、とてもとても残酷だった
- 「弟子たち」の修行と称してなにかひどいことをさせていたと聞く
- そのあたりの事情について、ぼくはそれほど詳しくはない
- 何人が死んだ、というのは噂でしかないので、とてもありそうな話に思えてし

- 各種報道を通じて見聞きしたところによると、彼女たちの集まる一軒家、その隣人たちとのいさかいがもとだという
- さまざまな宇宙で、彼女にはさまざまな予言の方法と、それにともなう死因があつた
- けれども、隣人たちといざこざを起こしていたことは共通していたようだつた
- もちろん、ナツキ自身について
- ……は、もう話したか
- それとも、おとぎ話の続きをしようか
- 次日の朝早く、彼は両手を縛られ馬車に乗せられる
- 彼が放り込まれた荷台は幌で覆われ、外は見えない
- 移動中に食べ物は与えない、大便も小便も垂れるに任せよとのこと
- 馬車はときおり休憩を挟みながら一昼夜走りつづける
- 御者はふたり
- 華奢で陽気な男と、小太りで不機嫌そうな男
- 話し声がときどき聞こえてくる
- おおむね言い争いだ
- ともあれ、それも一昼夜だけのこと
- 目的地に着くまで、たいした苦痛もなかつた
- 御者の大きいほうに、乱暴に腕を引かれ、外に連れ出されると

- そこには大きな白い塔
- 紹介がすんだから、あとちょっとだけ、この宇宙でのナツキと家族との関係について、いくつか補足しておくべきだらう
- ナツキと母
- そこそこ仲良くやつていたようではある
- ナツキに友達がいないことを心配しているようでいて、実際のところそれほど気にしていなかつたようではある
- 家ではあまり暗い顔をしなかつたからだらう
- その実ナツキが母親のことをどう思つていたかはよくわからない
- もちろん、母親がナツキのことをほんとうはどう思つていたかだつてわからない
- だけれども、ぼくは、きっと仲が良かつたのだと信じている
- 彼女はぼくもナツキも知らない場所でいまも生活をつづけている
- ナツキと兄
- 多少歳の離れたきょうだいだったから、彼らは互いのことをよく知らなかつた
- ただ、会えばそれなりにしゃべりもするし
- そのくらいの距離感だからこそなのかもしれない、兄は妹のことを人並みには可愛がつてゐるよう見えた
- 彼の友人のひとりに、とても臆病で、なにかをいうたびに、いやわからんけど、と付加える男がいた

- ときどき家にやつてくるものの、いつもナツキに会うことを怖がっていた
- ただ、ナツキは彼のことがちょっとだけ好きだった
- 違うな、これはまた別の宇宙の話だ

- ナツキと姉

- さつきも言ったように、きょうだいのなかではちょっと変わり者だった

- 難しい問題ではある

- 兄とちがつて面倒見がいい性格でもなかつたし、どちらかといえばナツキのことを行つたがつていたようにも思える

- 母が自分のことをかまつてくれなくなつたうらみのようなものがあつたのかもしれない

- これだつてただの想像でしかないけれど

- 中学を出てすぐに家から出て行つてしまい、ナツキとの接点は、やっぱりあまりないらしかつた

- そんなふうだつた

- なにを言うべきで、なにを言うべきでないか、ぼくにはよくわからないんだ

- ナツキと、しかたない、そうだ、最後に、ぼくについて



- あなたがやつてきたのは突然だった
- それもある日のことだつた
- またわたしは池袋の西口公園にいる
- そろそろ夏が終わりそうだ
- もう終わつたのかな？
- 昼間はひどく暑かつたけれど、いまはずいぶん涼しい
- ぼくはきみに勝てる
- そうあなたは言う
- 雲が月を覆い隠そうとする
- しかし月はそれに必死で抗つていた
- お、グーとペーじゃん
- じやんけんをするつてこと？
- どうしてあなたはそのことを知つてているのだろう
- そういうことだ
- 女性が二人、こちらを見やりながら通りすぎていく
- 華やかに着飾つて、なんだか楽しそうだ

- じつは彼女たちのことを、わたしは知っている
- 一方的にだけれど、何度も見かけているから
- なぜなら、とあなたは言う
- あなたは言う、ぼくはきみの父親なのだと
- わたしにじんけんを教えたのがこの男なのだと、そのときははじめて気がついた
- 同時に、あのおとぎ話のことと思い出した
- ただつびろい平野のなかに、忽然とそびえる白い塔
- 近づいていくにつれ、その基層がずいぶんと太いことに男は気付く
- 直径はおそらく半里ほど、見上げれば、すこしづつ細くなりながら雲の上まで伸びている
- 壁面は凹凸もなくのっぺりとして見え、人間が造ったもののようには思えない
- ほどほどに近づいたところで、小屋があった
- たどりつけばさつそくに、いかめしい顔の官吏が命ずる
- おまえはこれから、この塔の周囲を休まず回りつづけなければならない
- お前が寝ているあいだにはほかのやつに代わるから心配ない
- けれども、起きているあいだはずつと回りつづけるんだ
- そのあいだ、塔から目を離すんじゃないぞ
- お前の仕事は、言つてしまえばそれだけのことだ
- すべてを知つていると

- ・完全なものがいつたいなにか、それを知っていると  
・気に入らない
- ・きみのお母さんのこと、もちろん知っている
- ・それから毎日、彼は塔のまわりをぐるぐるぐると回りつづける
- ・件の小屋で出される飯は、いつたいどこから食材を調達しているのだろう、それなりにうまい
- ・寝ているあいだに代わりにこの仕事をやつているという奴と会ったことはない
- ・仕事の時間は、ときには夜だつたり、ときには昼だつたり
- ・二晩続くこともあれば、半日で済むこともあつた
- ・呼ばれて起きて、それからもういちど呼ばれるまでずっとずっと回りつづける
- ・ずっとずっと塔を見つめつづける
- ・退屈ではあるけれど、ずいぶんと楽な仕事だ
- ・あまりに楽なので、ここから逃げようとも思わない
- ・だから彼は真面目に、真面目に仕事をこなした
- ・囚人になる前からずっとそだつたからだ
- ・そういうしているうちに、いつも小屋で寝てばかりいる官吏ともずいぶん打ち解けた
- ・彼らも一交代で働いているらしいが、やっぱり代わりの官吏と会つたこともない
- ・ただぐるぐると回りつづけるだけだ

- ・きみのお兄さんのことだつて、きみのお姉さんのことだつて知つている
- ・宇宙をいくつかめぐつてね、勝てる方法を見つけてきたんだ
- ・つまらない方法だけれども、いや、それがなにかは言わないけれど、とにかくきみは、ぼくに勝てない
- ・気に入らない男だけれど、負けるのはほんとうらしい
- ・わたしにはわかる
- ・ある日のこと、官吏はこの塔のことについてすっかり話してくれた
- ・正月だからと酒が振る舞われ、気が大きくなつていたんだろう
- ・塔のまわりをぐるぐる回るわたしにまとわりついて、しゃべりはじめた
- ・この塔はな、自分たちの爺さんやひい爺さんが生まれるよりずっと昔からここに建つてているらしい。だけどな、昔はもつともつと細かつたんだと。まあ、こんな瘦せた土地、めつたに人も来ないし、昔の人はおおらかだったんだろうな、こんなおかしな塔だつて、そこにあることを疑問にも思わなかつた。だがあるとき、塔が年々すこしづつ太くなつていつてることに、だれかが気付いた。狂人だな。だが、狂人の言うことを真に受けるやつもいる。それから幾人かの学者がやつてくるようになつて、それこそ何世代にもわたつてやいやい調べた結果、わかつたことがある。どうもこいつは、だれかに見張られているときはびくともしないけれど、だれの目にも届かなくなつたときには、すこしづつ太くなつっていくんだと。なかなかたいへんなことじやないか。それを聞いた郡の長官は、なんで信じちまつたかは知らないが、こいつをずっと監視しておけと命じた。放つておいたら自分の治めるこの郡が塔に埋め尽されてしまうと

恐れたんだそうだ。あなたが死ぬまでだれも見てなかつたとしてもそんなことは起こらないと学者たちは言つたけれど、やつぱりこいつも狂人だつたんだろう。それからさ。こうして塔以外になにもないこの土地に小屋を建てて、囚人に監視させるようになつたのは。まあでも、人間のやることだ、なまけちまうこともある。そんなときに塔はちょっとずつ太つていつて、今じやこんなでかい塔になつちまつた。らしい。……そうそう、だからってなまけようなんて思うなよ。もしお前がなまけてるのを見つけたら、おれはお前をこの鉈で斬り殺さなきゃならん。ずっと昔からそういうきまりになつてるんだ。おまえの前任者もなかなか良い奴だつたが、まあなんだ、さつき言つたような事情でな。そんなときにはな、お前みたいな気の小さい勤勉な囚人を代わりにつけるのが決まりなんだ。だからお前も仕事に励んでくれよ。おれは監視するお前を監視するだけだ。そうしているうちに、どうさな、もう何年かすれば郷に帰れるはずなんだ。給金がいくら出ているかわからないけれど、妻や子供が飢えちまうようなことにはなつていないはずだ。そりやそうさ、ここでいくら金をもらつてもしかたがない。あいつらにくれてやるよう頼んであるんだ。そうだな、もう何年経つたことか

- だつたら、どうしたらいい？
- わたしは常に完全なパーをだしてきた
- 常に完全なグーをだしてきた
- 完全なチョキをだしてきた
- ほんとうに完全だつたか
- そうでないと、あえて言えることがあるとすれば、完全でないことができなかつた

- ・この宇宙では、ほんのすこしのものだけが完全で、あとはすべてが不完全だった
- ・その完全なすべてをわたしが背負っていた
- ・きっとそう、きっとそうだつたはず

・負けてしまおうか？

・じやん

・でも

・完全でないことができないということが、それがどんなことかなんて、わたし以外のだれにもわからぬ

・おれはこれでも自分の故郷が好きでな、星がきれいに見えるんだよ。ここらだつて開けてるからよく見えると思うだろう。だけど違うんだ。星がいつとうよく見える土地というのがこの世界にある。おれの故郷はそんな場所のひとつだ。そこから離れるにしたがつて、星たちはどんどんぼやけてくる。まあ、ここだつて俺の知つているうちではなかなかよく見えるほうだ。おれの故郷にはかなわないけれど。しかし残念だな、お前はずつとあの塔を見ていなきやならない。おつと、目を離すんじゃないぞ、さつきも言つただろう、お前が目を離せばおれはおまえを……

・けん

・そうだ、そうやつておまえはずつと塔を見ていればいい  
・ただ、つまらんな。おれにだつて人を斬つてみたくなるときもある。ここでおまえが目を離してくれれば、この退屈も解決つてもんだ。ただ、それはそれで面倒ごとを引き起こしもする

- 難しいもんだよ、ほんとうの仕事ってのは。おまえのようにただ見てているだけ、ただぐるぐる回りつづけるだけの仕事にはない難しさだ
- しかし、それにしてもつまらない。こんなに晴れわたった夜なのに。おれはこんなにも気分が良いのに
- そうだ。そうだな、じやんけんでもしよう。しようじやないか
- いや、お前は目を逸らしてはいけない。それがおまえの仕事だからだ。それじゃあ勝ったか負けたかわからぬだろうつて？ 問題ない、おれが教えてやる。お前がどんな手をだしたかは、お前が知っている。おれも知っている。いっぽう、おれがどんな手をだしたかは、おれしか知らない。だからおれが教えてやる。そうすれば、勝ったか負けたかもわかるつてもんだ。名案じやないか。いいだろう？ おれだつてつらいんだ。おれの女房が、じつはおれのこと好不好いことくらい、そのくらい気づいてるんだ。おれがいたときだつて、隣の独り身の女と、三日にいつぺんは会つていた。おれがいなくなつた今ではどうなつてゐるか。そんなことわかつたもんじやない。子供は勝手に育つてる。悪いことじやない。だが、いいことでもない。だからじやんけんをして氣を晴らそうと思つたわけだ。名案じやないか。ほら、だから、ほら、じやん、けん……つて、いや、やれよ。じやんけんをしようつて言つてるだろう。毎日言われたとおり馬鹿みたいにくるくる回つてゐるわりには融通の効かない奴だ。ほら
- けん
- けん
- でも、完全でなくなるとはどういうことか、それはわたしにはわからない

・完全でありつづけることと、完全でなくなること、どっちが怖い？

・だつたら

・親指をひろげて

・おとうさんゆび

・ぽん、ってな

・人差し指をひろげて

・おかあさんゆび

・ふむ、お前はパーをだした

・中指をひろげて

・おにいさんゆび

・薬指をとじて

・死んだ、おねえさんゆび

・おれはチヨキだ

・小指をとじて

・さて、もう一度やつてみるか。もちろんただそのままやるのはつまらない。たとえば、おまえがもし勝つたなら、おれとおまえの役割を交代するというのはどうだろう。賭けつてやつだ。

そうすればでくのぼうのおまえもちよつとくらいはやる気を出すつてもんだろう。どうだ？  
まあいいだらう、それでいこう

• ほら  
• じやん  
• けん  
• ぱん

そうして、わたしはあなたに勝つて、神の不在を証明する

• わたしはもういなくなるから